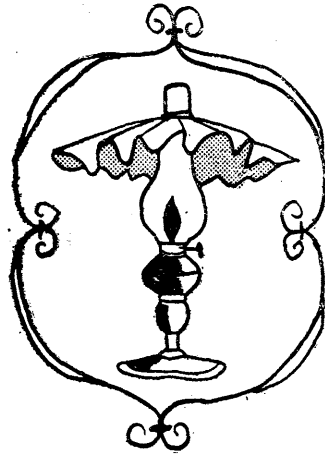


# 幼児の言葉から



加藤清子

たど／＼しい幼児の言葉。だがのである。

そこにはしば／＼ゆたかな詩情や鋭い批判があつて、おとなを感心させたり、あわてさせたりする。

「しえんしええ（先生の意）あさ、ぼくきたとき、

おたまじやくし、みんなねてい

たよ、うごかないもん、

新緑のころのすがすがしい朝の

こと。私より先に來ていたひろし

ちゃん（四才五ヶ月）が、ばたば

たと玄關にとび出してきて、おは

よう挨拶ももどかしそうに言う

でも、じきおきてうごいたよ。」

くる／＼した目。はずんだ声そ

して、私の手をとって保育室へ引

ばつてゆく。

「じゃあ、お目々がきめて、ひろしちゃんにおはようをしたのね。」

そういえば、三月はじめのある日、窓の外に雪の降るのを眺めながら、

そんな事を言いながら、ひかれ

「先生！

るままに行くと、窓ぎわの水槽の

はやく雪がやんで、

中で、水草をゆり動かして右往左

春がくるといいね。」

往しているまる／＼とふとつた十

と、ぼつんとつぶやいた女兒が

匹ばかりのおたまじやくし。私は

あつた。これもほとんど無意識に

同意を求めるひろしちゃんに答え

とび出してきて、直ぐに消えてし

ながら、日頃いたづらがはげしい

まつた言葉である。だが実に純粹

ということから問題児とされてい

である。

るこの児にも、このような一面が

毎朝々々、ひとみを輝かせてく

あつたのか、としばらくはそんな

る園児たちそこには一瞬の停滞も

思いにとらわれていた。そして、

なく成長する生命が、目にふれ、

小動物への愛情、率直な驚き、新

耳にし、手にするものをめぐつて

鮮な表現、これらは幼児のもつ最

発する言葉がある。これらはおと

も純粹な美德であるから、私達は

なの固定した考えで汚してはなら

これを失わせぬように注意しながら、

ない。私たちは絶えず白紙になつ

ら、豊かな情操へと成長させてゆ

て個々の幼児の言葉に耳を傾け、

かなければいけないと考えた。

その心を理解し、共感して、それ

を人生の知恵にまで高めてゆくようにはぐくまなくてはならない。

私はひろしちゃんの言葉を口の中であうたうようにくりかえしている  
と、これを得ただけでもおたまじやくしを飼育したかいがあつたという満足感がわいてくるのであつた。

× × ×

「先生おしゃれ、先生おしゃれ。」

「先生はかわいいな。」

これは私がピンク色の新らしいブラウスを着ていつた時の、幼児たちのやし言葉である。幼児は服装に敏感だ。

四月はじめ、寒いのでズボンでいたところ、

「先生、スカートはいていらっしやいよ。」と言う。

「今はく丁度いいのがないのよ、」

といったら、

「買ってあげる。」

という。これにはおどろいた、私たちのことを思つて現在の幼児のいわゆる、おませさんには驚くとくに女兒について先日もお母さま方との話しあいするとき、

「今時の子つたら、おしゃれで厭になりますわ。毎朝あれがきに入らぬ、このスカートがわるいのいいのと文句をいいますし、パーマントをかけたがりましてね、この寒いのにズボンをいやがつて。」

と一人が言ふと、みんな「本当に、本当に」とあいづちを打ち、  
「私がP・T・Aに出る時の着物の世話までやくんですよ。」

「私共の女学生時代は、髪にこてをあてても不良つていわれたものですのに。あんな小さいくせにあきれますわ。」

「このあいだもお友だちと、マニキュアの真似をしましてね、爪に赤いクレオンを塗つているんですよ。」

とおしゃべりがはずんだ。

「A先生のブラウス、赤くて胸のビラビラ（フリル）をひもで結んであるからA先生大すき。」

といった子供を、そのときは何とませているのかと、一寸不快になつたのであるが、お母さま方の

話しあいをきいているうちにうなづけるような氣持になつた。幼児たちは先生が絶対的な存在であるだけに、なかなか関心をもつてゐる。そして服装は一ばん眼につき

やすいものだけに、私たちの服装

を問題にするのも当然であるし、

いかに幼児といつても時代の影響

を受けることは勿論で、それをむ

やみと非難してはいけない。幼児

たちの先生に対する関心から情懷

を豊かにし、よい趣味を身につけ

るように、私たちは服装にもいろ

いろ考案して、いたずらに黒系統

の殺風景なものばかり身につけず

明るく落着いた感じのものをえら

ぶなどすることが大切であるし、

幼児に好ましい園服を選定するこ

とも必要ではないかと思う。

（松本市立松本幼稚園教諭）

× × ×

× × ×